

聖書:ルカの福音書1章26~38節

説教:おめでとう、恵まれた方

はじめに

アドベントの第二週目に入りました。先週は、祭司ザカリアを取り上げました。神殿で香をたいていたとき御使いが突然現れ、すっかり取り乱してしまったザカリアに御使いがこう語る。「あなたの妻エリサベツは男の子を産む。その名をヨハネとつけなさい。彼はイスラエルの子らの多くを、彼らの神である主に立ち返らせ、エリヤの霊と力で、主に先立って歩む者となる。」自分たち夫婦は高齢ですから、そんな話とても信じられないとザカリアが言うと、御使いは「それでは」ということで、子どもが産まれるまで口がきけなくしますと言われた。そんな話でした。

その御使いガブリエル、こんどはマリアのところに現れ、またまた驚くべきことを語っていく。そのときマリアは何を聞き、どう思ったのか。そこにどのような神のご計画があったのか。ともに考えてまいります。

## 1 御使い

### 1) あなたは神から恵みを受けたのです

28、29節。「御使いは入って来ると、マリアに言った。『おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。』しかし、マリアはこのことばにひどく戸惑って、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。」

ひとりの女性の部屋に突然知らない者が入って来たら、いまなら警察沙汰でしょう。そこはさすがマリアで、どんと構えて騒がない。むしろマリアが戸惑ったのは、御使いのあいさつのことばでした。「おめでとう、恵まれた方。」宝くじの一等にでも当たったのかしら。でも宝くじなど買った覚えはない。一体何がおめでたいのかと考え込むのも当然です。

御使いはそんなマリアに「あなたは神から恵みを受けたのです」と語ります。あらまあそれはすばらしいと思ったら、次のことばが衝撃的でした。31節。「見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。」

これを聞いてマリアがどんなに戸惑ったかは、後で見ることにします

### 2) ダビデに語った契約

御使いはそんなことはお構いなしに、どんどん話を続けます。32、33節。「その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」

神である主は、これから生まれてくるイエスと呼ばれる子に父ダビデの王位をお与えになる。これはサムエル記第二7章12、13節で、かつて神がダビデにこう語っておられたことと結びついています。「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」

あのダビデに語った約束を、いま神は果たそうとしておられる。御使いはこのような神のご計画をマリアに明らかにしました。

## 2 マリア

### 1) ひどく戸惑う

ザカリアは、御使いから告げられたことを信じなかったで口がきけなくされてしまいました。それに対して、マリアは御使いが突然現れてもあわてず、落ち着いて御使いのことばを聞こうとしています。しかしそんなマリアも結婚前なのに男の子を産むと言われ、さすがに動揺を隠せません。

動揺する理由は二つある。一つ目。ヨセフとはまだ一緒に暮らしていない。それなのになぜ妊娠するのか。どう考えてもありえない。もしかしてこの御使いは私をからかっているのか。それともなにかの罠だろうか。そもそも最初のあいさつからして怪しい。「おめでとう、恵まれた方。」調子のいいことを言っているけれど、典型的な詐欺の手法に似ている。これが一つ目。

二つ目。いまなら「できちゃった結婚」は珍しくなくなりましたが、日本でもかつてはそんなことになれば一家の大変な恥と思われていた時代がありました。聖書の世界はもっと深刻です。申命記22章23節によれば、結婚前に他の男性と性的な関係があった場合、二人とも石打の刑に処せられると書いてある。マリアは、すぐにこの律法のみことばを思い浮かべたはずで

ではマリアは身の潔白を自分で証明できるでしょうか。「神の聖霊によって子どもを宿したのです。」そんなことを言ってもだれが信用してくれるか。「頭がおかしい」とか「嘘つき」と言われるに決まっています。ヨセフにも迷惑をかけることになります。結局、世間から「ふしだらな女」と蔑まれ、最期は石打の刑で殺されるのだろうか。そう思ったら、とても喜ぶどころではない。「あなたは神から恵みを受けたのです」と言われても、悪い冗談にしか聞こえません。

## 2) 親戚エリサベツのこと

もちろん御使いは、自分が語ったことばでマリアが不安になるだろうということは予想しています。それでマリアを励ますためにこう言う。36, 37節。「見なさい。あなたの親類のエリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう六か月です。神にとって不可能なことは何もありません。」

神にとって不可能なことはない。マリアも信仰者でしたから、そんなことは頭では分かっていたでしょう。しかしある日突然に、「あなたは男の子を産みます」と言われ、その子があのダビデに語られた契約の子であると言われたらどうなりますか。聖書のことと自分の身に起きていることとがすぐに結びつかないのは当然でしょう。

みなさんも、突然何かが起きたときとか、聞いたりしたときに、「頭が真っ白になる」ことがあると思います。なにをどう整理していいのかパニック状態になってしまう。信仰があればなにかがあっても大丈夫と言う方がときどきありますが、そんなことはない。あのマリアだって不安になってしまったのです。神はそのこともご存じで、ちゃんと手当てをしてくれる。

それでどうしたか。御使いは親類のエリサベツのことを引き合いに出します。ザカリヤが神殿で御使いを見たことやエリサベツが妊娠したということは、すでに大きなうわさになっていて、マリアも知っていました。でもマリアはそれを聞いた時、不思議なことがあるものよ、とどこか他人事のように受けとめていた。ところが御使いは、あのエリサベツとあなたの身に起きていくことには強い結びつきがあるのだ、と教えてくれました。

## 3) 私は主のはしためです

マリアはどうしたか。38節。「『ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおこ

とばどおり、この身になりますように。』すると、御使いは彼女から去って行った。」

「はしため」ということばは、取るに足りない身分の低い女性という意味です。単なるへりくだりということではなさそうです。御使いからいま聞かされたことを、マリアは頭をフル回転させながら、これはどういうことかと一生懸命考えました。ところが、考えても考えてもストンと納得いくような答えが見つからない。それでマリアはどうしたか。「こんな科学的に説明がつかない話しは信じられません。イエスの母になることはご辞退申し上げます」と言ったか。その反対。「私は主のはしためです」と言った。それはこういうことです。私の頭では理解できません。でも、主は全知全能ですから不可能なことはありません。すべてを主にお委ねします。そして続けてこう言う。「どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」すべてが分かるわけではない。でも主が恵みとしてくださると言うのであれば、私はそれを信じますと告白したのでした。

## 3 神の計画

### 1) ある日突然に

マリアはこのとき中学生くらいの年齢だったろうと言われます。さすがマリアだ、私には真似ができないと言うのでしょうか。でも、マリアほどではないにしても、私たちも人生のなかで神に迫られるような場面に出くわすことがあったのではないのでしょうか。それは前もってこうなるよと教えられることはありません。「まさか」という瞬間が突然に向こうからやってきます。病院で検査を受けたら重い病気があると告げられた。ある朝会社に行ったら上司に呼ばれて解雇を告げられた。信頼していた友人に裏切られ、お金を持ち逃げされた。いろいろなことが起きる。私の場合は、二年前に高速道路を走っていて車が急停車してしまったことを思い出します。車が止まった瞬間、何が起きたかはわからない。アクセルを踏んでもまったく動きません。このままだと、うしろから車が突っ込んできて死ぬかもしれない。そう思いました。車が故障した原因は、整備会社の整備不良であったことが後で分かったわけですが、でも信仰という面で見るなら、あの事故がどんな意味をもっていたのか、考えてもわかりません。

### 2) たとえ分からないことがあっても

マリアもわからなかった。しかしマリアは最後に告白します。「私は主のはしためです。」考えて

も無駄なのであきらめた、という消極的な意味ではありません。もっと積極的です。人間が考えることなどたかがしれているのです。でも神は最善のことをしてくださっている。それがどのようなことかは分からないけれど、でも神を信じてゆだねていく。マリアの時から数えれば、およそ千年前に神がダビデの約束してくださったこと、その約束を神が果たすと語ってくださったと言うのなら、そのことを信じていく。マリアはそのような信仰に導かれていきます。もちろん、だから安心できたというわけではありません。とても不安です。それですぐにエリサベツから話を聞きたいと願って向かうわけです。

### 3) 神がともにおられる恵み

信じれば不安はないと言う方もいます。でも、そうでないときもある。信じているつもりでも不安があるし、恐れがある。「恐れることはありません」と言われたって恐れる。不信仰だということではありません。そんな私たちのために、神はともにいてくださると言われます。御使いは言いました。「主があなたとともにおられます。」そして30節もそうです。「あなたは神から恵みを受けたのです。」これは言い換えるとうなる。「あなたは、神がともにおられる恵みを受けたのです。」たとえ突然の思いがけないことが起きたとしても、常に神は私たちを捨てることなく、とともにいてくださる。そのことを信じて歩んでまいります。